被虐虜囚・イレーナの無残

タルギリア共和国にとって独裁者ザイエフという存在は、まさに人の姿をした災厄そのものであった。

独裁者と成り果てるまで、ザイエフはただの一介の軍人に過ぎなかった。軍での階級は少佐で、彼が動かせる兵や部隊は決して多くなかった。彼は野心家であり、いつか人の上に立ち、万人を支配することを夢見る男であったが、野望の前には常に現実という番人が立ちはだかっている状態で、ザイエフにとって野望とは、現実から逃避するための空想の産物に過ぎなかった。

ところが、そんな状況が一変したのが二〇年前のことである。当時、タルギリアは王国で、国王が国を支配する王政が敷かれていたのだが、民主化を求める学生運動を武力でもって鎮圧したことをきっかけとして革命の機運が高まると、ザイエフはいち早く民主化を求める民衆への指示を表明すると、部隊を率いて王宮へと乗り込んだのである。そして、国王とその家族、側近や重臣たちを捕らえると、公正な裁判もおこなわず全員を銃殺刑に処し、タルギリアを王政から解放したことを宣言したのであった。

ザイエフは一躍英雄となり、タルギリア国民は歓呼を持って彼を讃えたが、民衆たちの甘美なる時間は長くは続かなかった。

ザイエフは、治安維持を名目として戒厳令を敷くと、暫定自

治政府ができるまで自らがタルギリアを掌握することを宣言した。ザイエフの主張は理に叶っており、また、彼は救国の英雄として人気者になっていたから、民衆はそれを快諾したのだが、それが悪夢が始まるきっかけになろうとは、この時はまだ誰も思いもしていなかった。

権力を手中に収めたザイエフは、まず手始めに、自分が敵と見なした貴族や政治家、軍人や弁護士、社会活動家や記者などを不穏分子として捕らえると、裁判も無しに全員を処刑してしまったのである。その数、実に四五〇〇人に達した。さらに秘密警察を組織して市民には密告を奨励すると、自分に逆らう者、歯向かう者、あるいはその予備軍たちを次々と捕らえ、強制収容所へと送り込んだのである。そして、まるで家畜を処理するかのごとく、何万人もの人間をガス室へと送り込んで処刑したのであった。

タルギリアの国民が、「騙された！」と察した時にはもう遅かった。ザイエフは、独裁者としてタルギリアに君臨し、絶対の支配者として猛威を振るいはじめたのだ。

ザイエフは言った。

「私の願いは、このタルギリアを強く美しい国にすることだ。そのためであれば私は、いかなる悪名も汚名も甘んじて受け入れる所存だ」

ザイエフが言う強く美しい国――それは人権をないがしろにした非道国家であった。ザイエフは国民に重税を課し、軍備を強化すると同時に、国内から「汚い者」たちを一掃することに

熱を上げた。それは身体的・精神的に障害を持った者の殺害であり、先天的・遺伝的欠陥を持って生まれた者たちの抹殺であり、手に職を持たない者、路上生活者、浮浪児、アルコールや薬物中毒者たちの根絶であった。ザイエフが独裁者として君臨した二〇年間で、タルギリアではおよそ二〇〇万人もの人間が言われなき罪によって殺戮された。

一方、国民の生活もまた悲惨だった。国民は過度の重税によって痩せ衰え、骨と皮だけになっても働かされ続け、地方の農村や鉱村では餓死者が毎年のように発生したのだが、ザイエフはこれを「名誉と栄光ある苦難」と称して賛美した。

国民に過酷な生活を強いる一方で、ザイエフ自身は自分の宮殿で贅沢な生活を堪能していた。彼の宮殿は歴史的建築物を模した豪華な宮殿で、その資材は国内外から集められた最高級のものばかりが使われていた。特にふんだんに使用されていたのが総重量数百トンにのぼるとされる金と琥珀で、これらを外国から購入するために、ザイエフは国家予算の七割を費やしたのであった。この豪華な宮殿に、ザイエフは自らの家族を住まわせた。

ザイエフには三人の息子と四人の娘がいたが、特に彼が可愛がっていたのが末娘のイレーナであった。彼女はザイエフが政権をとった後に生まれた子どもで、ザイエフは彼女のことを目に入れても痛くないほど可愛がっており、彼女を汚れた外の世界で穢すまいと、イレーナを宮殿の外に出すことなく生活させていた。

イレーナは大変に美しい娘であった。彼女の姿を目にした者は、その姿を「まるで花の精のようだ」と形容しており、ザイエフの側近たちは、決して口には出さなかったものの、なぜザイエフのような男からあんな美しい娘が生まれたのだ、と首を傾げることしきりであった。

ザイエフ自身も娘の美しさを絶賛しており、イレーナをモデルとした女神の像を数多く造り、それをタルギリア中に置いて国民の目に触れさせた。

ザイエフは娘をモデルとした女神像を見て、

「これぞ真の美しさ」

と絶賛したが、これが後に悲劇を招くことになろうとは、この時はまだ想像すらしていなかった。

ジェベド・オルマティスという男がいた。秘密警察の下部組織に席を持つ男で、「容疑者」に対して拷問と尋問をおこない、「自白」を引き出すことに秀でた男である。容姿は醜く、性格は卑屈で、これまで業務中にしか女性と接したことのないような男であったが、ある時、そんな彼が恋をした。街中に設置されたイレーナの像を見てひと目惚れしたのである。

「な、なんて美しい女なんだ・・・・・・」

同時に、彼は思った。

「この娘を俺のモノにしたい・・・・・・」

と。

この瞬間、ジェベドのドス黒い欲望に火が点き、彼の中で眠っていた蛇がゆっくりと鎌首をもたげた。蛇の名は「行動力」

といった。

ジェベドはイレーナを我がモノとするために、さっそく活発に行動を開始した。

まず、彼は打倒ザイエフを掲げる幾つかの地下組織に接触を図ると、彼らのパイプ役となり、繋げ、ひとつの組織にまとめることに成功したのである。同時に、上司に対しては、「反政府組織を一網打尽にするため」と称して、彼らの信頼を勝ち取るために武器と資金を流す必要性を訴え、承諾を得た。こうして、地下組織を強化することに成功すると、ジェベドは彼らにザイエフの宮殿を襲撃することを提案したのである。そしてそのことを秘密警察にも報せたのだった。ただし、襲撃を確実に成功させるため、また、それまで秘密警察に手出しをさせないため、襲撃の日時を一日違えてだ。

かくして六月一〇日、宮殿襲撃が決行され、三〇〇人もの反政府勢力がザイエフの宮殿に攻め込んできた。

この襲撃は完全に成功に終わった。不意を突かれた宮殿側は、ろくな抵抗も出来ずに警備兵が次々と撃ち殺され、ザイエフとその家族は宮殿内を逃げ惑った果てに一室に追いつめられ、至近距離から大量の銃弾を浴びて殺害されたのである。

ザイエフの最後の言葉は、

「やめろ、やめてくれー！」

という絶叫であったと記録されている。強勢を誇った独裁者の哀れな末路であった。

ザイエフが殺害されたという一報が速報としてタルギリア全

土に流れると、市民たちが一斉に蜂起した。ザイエフに対する怒りと憎悪が爆発し、さらにそこへ自由への渇望も加わって、市民による革命へと発展したのだ。

その後の流れは劇的だった。六月一三日には宮殿を襲撃したメンバーらを中核とした臨時政府が発足し、独裁政治から市民が中心となる民主政治へ移行することが発表された。そして殺害されたザイエフとその家族らの無残な死体が国立広場に掲げられ、晒し者とされたのだが、この時になって臨時政府は死体がひとつ足りないことに気づいたのである。末娘イレーナの死体がなかったのだ。

実はここに語られない歴史が存在している。反政府勢力が宮殿を襲撃した時、その混乱に乗じてイレーナを拉致した者がいたのだ。その者の名は、ジェベド・オルマティス。彼は襲撃の当日、極一部の者しか知らない地下通路を通じて宮殿に潜入すると、襲撃に混乱するイレーナに近づき、言葉巧みに彼女を騙すと、そのまま地下通路を通じて彼女を宮殿の外へ連れ出すことに成功したのである。そして、あらかじめ用意しておいた自分の隠れ家に彼女を招きいれたのであった。

そこは様々な拷問器具が用意された彼の楽園だった。

そしてジェベドは、この予想外の事態に動揺するイレーナに対して、おぞましく醜悪な笑みを向けると、口元を歪めて言ったのである。

「さぁ、宴をはじめようか」

ジェベドの狂気と肉欲に満ちた宴がはじまった・・・・・・。

てお楽しみください。

続きは本編に